
TALES OF SCHOOL LIFE

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T A L E S O F S C H O O L L I F E

【Nコード】

N 3 4 1 7 B A

【作者名】

唐笠

【あらすじ】

これはテイルズオブエクシリアの主人公、ジュードを中心とした学園生活を描いた物語である。

個性的な仲間たちとともに繰り広げる笑いあり（痛みの）涙ありのドタバタ学園パロディ。

果たして彼はその先になにを見出し、なにを得るのか！？

そして、この物語に意味はあるのか！？

作品内のCPは作者の偏見により構成されております。

また主にエクシリア・ヴェスペリア・シンフォニア（ラタを含む）・

アビスからの登場が多くなると思います。

第1話 僕と学園と出会いの春（前書き）

ティルズの二次創作です！

実をいうと、ティルズの二次創作は初じゃなかったり…

タイトルがどこぞのバカたちが織り成す話に似ているのは仕様です

（笑）

第1話 僕と学園と出会いの春

ここは私立シツポ学園。

別にTAIL（尻尾）であってTAL（話）ではないのでご了承願いたい。

まあ、何はともあれここは東西南北から色々と癖が強い人たちが集まる高校だ。

ある意味特色ある学校と言えるだろう。

そして、今年もそんな珍妙な学校の門を叩く生徒たちがやって来る。

「はあはあ………」

まずい！

このままじゃ入学式早々に遅刻だよ！

そんなことを考えながら、パンをくわえ全力疾走しているのはジュード・マティス。この話の主人公である。

そこ、パンをくわえながら走るのはヒロインの役目とか言わないように。
彼はそれを散々ネタにされたのだからそろそろやめてあげてほしいものだ……

「うわぁ!?!」

「おっと!」

しかし、お決まりのように曲がり角での衝突は避けられなかったようである……

しかも相手は受け身をとったのにジュードの方はしりもちをついただけだ。

大丈夫か、主人公……

「いたたた……」

「大丈夫か?」

この一見すると男のような台詞を言ってジュードに手を差しのべたのがミラ・マクスウエル。主人公っぽい言動が多いが立派なヒロインである。

「あつ、だいじょ……」

そう言ってジュードも差し出された手を掴もうと顔を上げるが、角度的にミラの短いスカート（パレオに見えなくもない……）の中が今にも見えそうなため言葉に詰まってしまふ。思春期の彼にはこの上ないほどのダイレクトアタックだろう……

「どうしたのだ？」

まさかさっきので立てなくなってしまったのか？」

（今の状況にたちそうです…）」

黙れムツツリ。

そういった話題はどこぞのFクラスメンバーと話してこい。

「すまない、私も今は急いでいるためもたまたましてはられないのだ」

「あっ、こちらこそすみません…」

「うむ。見たところ目立った外傷も無さそうだし大丈夫そうだな」

それだけを確認するとミラはそそくさと走り去ってしまった。

（きれいな人だったなあ…）」

当の思春期真っ盛り君は遅刻目前だというのに彼女の走り去る姿をポーツと眺めていたのだった…

ジュードSIDE

「以上で入学式を終了する。各々、割り振られたクラスへ向かうように」

マイクを持ったクラトス教頭の言葉で入学式が締め括られる。それにしても、入学式の日には寝坊はついてなかったなあ…一応、間一髪のところまで入学式には間に合ったけど、先生たちに目をつけられていないことを願おう。そんなことを考えながら僕は自身の所属クラスである1 - Aに向かっていた。

「あ、あの……」

そんな最中、僕にかけられたたどたどしい声。

その声に振り向けば奇妙な人形を抱えた少女がいた。見た目的に高校生じゃないから、小学生が迷い込んでしまったのだろうか？

「どうしたの？もしかして迷子かな？」

「あつ、いえ…」

そうじゃなくて…1 - Aの教室を探して…」

1 - Aと言えば、僕の向かう先と同じだが小学生にしか見えない彼女がそこに向かう訳がないだろう。

「ここは小学校じゃなくて高校だよ？」

「いえ…私はその…飛び級生で…」

「えっ…」

こちらの顔色を伺いながらも言った彼女の言葉が僕には信じられなかった。

飛び級生と言え、俗に言う天才のみに与えられる称号であり、自身の学力に見合った学年にまで進級できるといったものだ。

それは同時に彼女の目的地が僕と同じということの意味するわけで

……

「なんだあ！

その不服そうな顔は！文句でもあるのか！」

思考の海をさ迷っていた僕に向かって彼女の抱えた人形がつかかってくる。

……

……

……

……

「ええええ！？」

人形がしゃべったあああ！？」

「人形じゃなくてティポって言うんだぞ！」

僕の驚く声にびくついた少女とは裏腹に人形の方はなおも僕に挑戦的な眼差しを向けていた。理由はどうあれ、自我を持っていることだけは確かのようにだ。

「ティポは……私の……友達なんです」

「そっだよ」

僕はエリーの友達なんだよ」

「エリー？」

さっきまでとは打って変わって間延びした声のティポに僕は首を傾げながらたずねる。

「その…エリーっていうのは私のことで……
本名は……エリーゼ・ルタスと言います」

「そ、そうなんだ…よろしくねエリーゼ。僕はジュードだよ」

「はっ、はい…よろしくおねがいます…ジュード」

一応、同じクラスになるのだからからおかしくはない会話なのだが、どうもエリーゼのびくつき具合が気になってしまっ。

「とにかく教室に向かおうか」

「は、はい」

「優しい人がいっぱいいるといいねえ」

「そこらへんは大丈夫だと思うよ。たぶん……」

まあ、さすがにクラス中が不良ということもないだろうから大丈夫だろう…

そう思い、いつの間にか辿り着いていた1-Aの扉を開ける。

「「双牙斬!!」」

ガギィーーン!!

どうやら僕は教室を間違えたようだ。
認めないぞ…

僕は同じ顔をしてるやつが教室で争ってるのなんて決して認めない
んだからな！

「ジュード…入らないんですか…？」

「とつととしろお！」

僕の後ろにいるためエリーゼとティポは教室内の様子を理解して
ないようだ。

それを幸ととるべきか不幸ととるべきか……

「エリーゼ、ちょっと待っててね」

「どこか行っちゃうんですか……」

「違つよ。」

ちよつと教室の中に危険なところがないか確認してくるだけだから
さ」

そう言つてエリーゼの頭にそつと手をのせると、僕は教室に入つて
いった。

「くらいやがれ崩襲脚！」

「甘いんだよクスが！紅蓮襲撃！！」

赤髪二人が懲りずにケンカを続けていた。

さすがにあのケンカにわつてはいる勇氣はないので、周りを取り囲

んでいる比較的話しやすそうな人物に声をかけてみる。

「あの、これっていったいなにがどうなっているんですか？」

「ん？」

「あんたもAクラスか？」

「あつ、はい。Aクラスのジュード・マティスです」

「なぜだか僕の質問が流された気がしないでもないが、自己紹介は必用だろうと思いついておく。」

「よろしくなジュード。」

「俺はロイド・アーヴィング。んで、こっちにいるのがコレットとジーニアスだ」

ロイドの名乗った青年が人の良さそうな笑みを浮かべ、自身の後ろにいる二人の紹介をする。

「よろしくねジュード」

「こちらこそよろしくねジーニアス」

「たったこれだけの会話だけどわかったことが一つある。」

「それは話しかける人を間違えたということだ。」

「たしかにロイドは悪いやつじゃないだろうけど、状況を分析するにはむいていない。その点、ジーニアスはそうだったことが得意そうである。」

「ジュードはワンちゃん好き？」

「わ、ワンちゃん…?」

「犬のことだよ?」

コレットが不思議そうに聞いてくるが、ワンちゃんが犬を示してくることがくらいはわかる。問題なのは、なぜこのタイミングで聞かれたのかということである。

「まつ、まあ…好きだよ」

「やったあ」

じゃあ、今度一緒にワンちゃんの餌やりしようね

「う、うん…」

喜ぶコレットにおさねながら生返事をする。

「コレット、餌やりもほどほどにしろよ…」

「大丈夫だよ」

「本当に大丈夫かな…」

この前なんて隣町まで行って野良犬に餌やりしてたじゃないか…」

あれ…?

もしかしてさっきのって気軽に引き受けちゃまずかったのかな…

「まあまあ、そんなに言わなくなっちゃっていいじゃないかジーニアス。今度は俺も着いてくからさ」

「前回だってそう言って、結局は寝坊して来なかったじゃないか…」

「あれ？」

「そうだったか？」

「わりい、わりい、俺も悪気があってやったわけじゃないんだ」

「本当に今度はちゃんと頼むよロイド…」

呆れるように言うジーニアスに明るい笑みを浮かべるロイド、そしてすでに状況が呑み込めないのか、はたまたそれでいてにこやかな笑みを浮かべているのかわからないコレット。

「なんだか三人とも仲良いみたいだけど同じ中学校だったりするの？」

「ああ、俺たちは小学校からずっと一緒なんだ」

「家も近所なんだよ」

「と言っても、ここは全寮制だから関係ないんだけどね」

ジーニアスの言う通り、ここ私立シツポ学園は全寮制なのだ。
たしか僕は151室だったよね。

.....

.....

.....あれ？なんか
忘れてない？

「通牙連刃斬！！」

「空破絶風撃!!」

そうだった…

元々、同じ顔した人たちの奇妙なケンカの詳細を聞きに来たんだっ
た……

「ねえ…あの二人はいつたいなんなの？」

「ああ、あの二人はルークとアツシュと言って双子みたいだぞ」

「よく知らないけど、どこかの貴族らしいよ」

「そう…なんだ…」

言われてみればたしかに貴族の風格らしきものが漂ってなくもない。
ケンカしてて台無しだけど……

「それにしてもなんでケンカなんてしてるんだろっ?」

「ケンカするほど仲がいいって言うから仲良しさんなんだよ」

もうコレットにはどこからつつこんだらいいかわからない…

「本人たちの好きにさせとけばいいよ。」

貴族だかなんだか知らないけど、僕は争い事は好まないからね」

「あははは…

僕もちよっとそういうのは勘弁してほしいかな」

なんだかジーニースとは気が合いそうだなあ…

「だけど男同士の拳での語り合いも必用だぜ？」

だからと言ってあれはやりすぎなんじゃ…

「さすがに止めた方がいいよね…？」

「大丈夫だよ。勝手に止まるからさ」

「そついうものなの…？」

「まあまあ、見てなつて」

ジーニースの言うことが疑問ではあるが、一応二人を見守ることにする。

「飛燕瞬連斬！！」

「斬魔飛燕斬！！」

いつの間にか空中戦に発展してる…

このままじゃ設備に被害が出かねないよ！？

「ノクターナルライト！」

「うわあ！？」

あっ、へソ出しが投げナイフで撃ち落とされた…

「ピアシスライン！」

「ぐはあ！？」

オールバックの方も矢で撃ち落とされてるよ…

「ルーク！」

あなたはもう少し静かにできないの！」

「アツシユもですわ！」

少しは周りの方の迷惑を考えてください！」

「ごめんティア…」

「すまないナタリア…」

さっきまで騒がしかった二人が途端に大人しくなる。なるほど、尻にひかれるタイプか…

「お騒がせしてすみません」

「これからはこういう事がないよう、二人にはよく聞かせておきますわ」

そう言っただけティアとナタリアが頭を下げる。

ナタリアの方は話口調から察するにルークやアツシユと同じ貴族の出だろっか？

「そんなに固くならなくていいって。」

それよりも同じクラス同士仲良くしてっせ」

「みんな仲良しが一番だよ」

ロイドにコレットはフレンドリー過ぎやしないだろうか…

「あまり馴れ馴れしくするなよ。」

あくまで級友として付き合うだけだ」

アッシュの方は偉そうだな…

それともこういうのをツンデレっていうんだっけ？

「俺様はルーク・フォン・ファブレ様だぞ。」

なんでこんな平民なんかと付き合わなきゃいけないんだよ！」

こりゃ、アッシュ以上に酷い…

あのロン毛を切ってやりたい気分だ。

「ルーク、ちよつといいかしら」

「あつ、ちよつ、まてティア！

悪かった！俺が悪かったから許してくれティア！」

まあ、今のさつきなんだから怒られて当然だよね…

そんなことを思って廊下に連れ出そうとするティアに引きずられていくルークを冷めた目で見ていると教室の扉が開く。

「おいおい、朝っぱらからお置きタイムか？

そういう殊勝なプレイは夜にしてくれよ」

「どう見たら今の状況がそう見えるんだよ！」

恐る恐る手を上げた僕にアルヴィンが近づいてくる。

「ほー、お前がジュードか…

優等生面してんなあ……」

「あの…僕のことなにか知ってるんですか？」

僕の顔を品定めするかのようにあごに手を当てて言うアルヴィンにたずねる。

「知ってるよ。ジュードって名前で俺のクラスの生徒だってことを」

「そう意味じゃなくて誰から僕のことを聞いたか聞いているんだけど……」

「ジュード君が廊下に放置したお姫様からだけど？」

「……あつ……」

教室のごった返しですっかり忘れてた…

そう思い、急いでエリーゼのいる廊下に向かおうとした時、アルヴィンの後ろからちょこんとエリーゼが顔をだした。

「ジュード…忘れるなんて酷いです……」

「ジュード君の薄情者ー！」

「ごめん…エリーゼ、ティポ……」

なんか今日は失敗続きだな…
こんなんで本当に大丈夫だろうか…？

「はいはい、ケンカはそこまで。
みんな席につけ。自己紹介を始めるぞ」

アルヴィンの一声でみんながぞろぞろと席につく。
えーと、僕の席は…と……………あつた！
僕の席は窓側の席で春真つ盛りの今は日光が暖かくて気持ち良さそ
うだ。

それにしても隣は空席だけど、入学早々に欠席なのかな？

「じゃあ、適当にまどが」

ガラガラ

アルヴィンが言い終わる前に教室の扉が開けられる。

「はあ…はあ…遅れてすまなかった…」

そう言って入ってきた人は僕の予期せぬ人物だったんだ…

第1話 僕と学園と出会いの春（後書き）

教室に入ってきた人物とはいっただい！？

えっ？

どこかのバカコメに同じ展開があった？

き、気のせいですよ…

次回もよろしくお願いいたします！

第2話 僕と自己紹介と黒髪の美女(前書き)

颯さん、神代美樹さん感想ありがとうございました！

第2話 僕と自己紹介と黒髪の美女

ジュードSIDE

朝の人だ…

教室に遅れて入ってきた人は朝のパンチラの人だったのだ。
えっ？

失礼な呼び方だって？

だって他になんて呼んだらいいかわからないし…

「なんだ？遅刻か？」

「うむ、遅刻に間違いない」

教壇に立つアルヴィンにパンチラの人は凜とした面持ちで言う。

「名前はミラ・マクスウェルであってるか？」

「間違いない。それが私の名だ」

「じゃあ、ジュードの隣に座ってくれ」

アルヴィンが僕の隣の空席を指さす。

僕もつられて視線をそちらに向ければ、たしかに座席にミラ・マクスウェルと書かれたプレートが置かれていた。
なるほど、パンチラの人はミラっていうのか。

「遅刻記録はとらないのか？」

「今から自己紹介始めんだから遅刻にはならないって」

「しかし、私は入学式に出なかつたのだぞ？」

たしかにそれによつてミラに目をつけた教師がいるかもしれない。かく言う僕も遅刻ギリギリだったのは否定できないけど……

「んなもん気にしないって。」

というか、そういう届け出書くのがめんどくさいんだよな」

えっ!?

結局はそこにいきつくの!?

「私一人にそれを許せば、よくない風潮ができかねなのだぞ」

ミラの言う通りなんだけど、なんというかかなり堅いなあ……
胸はあんなに柔らかかそうなのに……

「そんなときゃ、ちゃんと教師としての勤めを果たすさ」

「そうか……」

なら、今回は引き下がるとしよう。すまないな」

「気にすんなって」

アルヴィンとの押し問答を終えたミラはつつかつかと僕の隣にまで歩いてくると席についた。

長い髪がふわりとなびいて、そこから微かに甘い匂いが漂う。
いい香りだなあ……

.....

.....

.....

.....

あれ？

なにも話しかけてこない……

さすがに朝会ったばかりだから忘れられてると思わないんだけどなあ……

「あの……ミラ？」

なんで僕は疑問形で話しかけているんだろう……

「ん？」

たしか君はジュードだったな。私になにか用か？」

「その……朝会ったよね？」

「うむ、たしかに私と君は朝衝突してしまったな。

あの時は謝罪も早々に済ましてしまっただけですまなかった」

「あつ、いや……それはいいんだけどさ……」

まずい……

なんとかして話題を続けないと接点がなくなってしまう。

「他になにかあるのか？」

「……………特にありません……………」

「自分から話しかけてきたのに君は変わったやつだなあ……………」

そう言ってミラはクスツと笑う。きっと変人だと思われたのだろう。
さよなら僕の青春……………」

「つつことで気い取り直して自己紹介を開始するぞ。
窓側の列から順に言ってけ」

そんな僕の気も知らずか、はたまた知ってわざとなのかはわからな
いが、アルヴィンが軽快な口調で言う。

僕は前から三列目だから今の内になに言うか考えとかなきゃ。
まずは名前を言うとして、次はどこから来たかでいいかな？
他はえつと……………」

「次、ジュード」

えつ!?

もう僕の番なの!?

まだなにを言うかほとんど決まってないのに……………」

ガタツ

席から立てばクラス中の視線が僕に集まる。

こういうのって慣れないから恥ずかしいなあ……………」

「えつと……………ジュード・マティスです。」

中学はイルファン中学で、その頃から独り暮らしをしてきました。
後は……………」

なっ、なにを言おう!?
考える!考えるんだ僕!!

.....そうだ!

好きなものを言おう!

それで終われば特に目立つこともなく終わるだろう。

「好みのタイプは『胸が大きくて、髪が長くいい香りがする人』です!」

ふう...なんとか言い切った.....

.....

.....

.....

僕はいったいなにを言ってるんだろう.....

「以上、ジュード君の自爆劇でした。みんな惜しみ無い拍手を!」
アルヴィンのはやしたてで沈みかえっていたクラスがどよめき始めた。

「自分の好みをバラすとかあいつはバカか?」

クラス入って早々にケンカしてたアッシュにバカ呼ばわりはされたくないよ.....

「ははっ、やっぱりジュードは面白いやつだな」

ロイド!

やっばつてなに!?

最初から僕のことをそういう風に見てたの!?

「でひゃひゃひゃ、俺様ジュード君とは中々気が合いそうだわ」

全体的にチャライイメージのある優男が独特のバカ笑いをしている。こんなのと同類なんてのはまっぴらごめんだ。そしてお前は誰だ!?

「僕はあんなに堂々と言えないよ…」

気の弱そうな金髪アホ毛少年が僕の方を羨望の眼差しで見ってくる。たぶん、僕がやったのは君が思ってるほど立派なことじゃないよ……

「……………よろしくお願いします」

僕はそれだけを言うとうつつ向きながら席につく。

「ジュード、大丈夫か？」

顔が真っ赤だかもしかして熱でもあるのか？」

「大丈夫…」

大丈夫だから、少しそつとしいてくれないかな……」

「うむ、君がそう言うならば仕方がないな」

「ありがとうミラ…」

そう言うと僕はなるべくミラと視線を合わせないように窓側に視線を向ける。

.....あつ！

僕は自分の目を疑って一度視線をそらし、再度目をこらす。しかし、それは消えることもなくそこにいた。

窓から程近い木の上で女の子が寝てるのだ。

今はどの学年もなんらかの作業をしているはずなのになにをやっているんだろう？

黒く長い髪に整った顔立ち、そして傍に立て掛けてある細身の剣。まるでどこぞの炎の翼で空を飛ぶヒロインのような特徴である。

「オーブンジュード君、外に好みの女の子でも見えたか？」

「なに！？」

俺様にも見せろ！どこにいるんだジュード君！？」

「誰もいませんよ！」

たぶん、あのチャラ男とアルヴィンがこのクラスでの僕の天敵になるだろうし、なによりこれ以上僕の評判を落とすたくないと思っ嘘をついておく。

それに一つ言えば、あの娘はあまり僕のこのみじゃない。

どちらかといえばミラみたいな人が好みかな？

「ジュード君」

そんな下手な嘘ついたって俺はだませないよ」

「あ、アルヴィン……」

僕の肩にもたれ掛かるようにアルヴィンが言う。

まずい……

この角度から外を見られれば、間違いなくあの娘がアルヴィンに見

つかってしまっただろう。

「……………なんだ、本当にいないのか……………」

「えっ?」

見ればたしかにあの娘はいなくなっていた。

ほんの数秒前まではたしかにそこにいたのにどこに行ってしまったのだろうか?

「ん?」

その意外そうな反応はなにか隠してるな?」

「な、なんにも隠してませんよ!」

「まっ、今となっちゃ過ぎたことだし詮索しても仕方ないか」

そう言うとアルヴィンはまた教壇へと戻って行ってしまった。

ふう……………なんとか助かったかな……………?

ほっと一息つきながら、みんなの自己紹介をボツと聞く。

「俺様ゼロス。ゼロス・ワイルダーね。

ハニーたちよろしく〜

野郎どもはどうでもいいや」

あの優男はゼロスって名前か……………

しゃべらなければある程度カッコいいのに、しゃべると見事に三枚目である。

「あの……………エミル・キャスタニエです……………」

中学はマルタと一緒にパルマコスタ中学に通ってました。よろしく
お願いします」

さっきの金髪アホ毛の人はエミルか…

気は弱そうだけど、このクラスの中では比較的まともな方な気がする。
る。

「やつほー！

私はマルタ。マルタ・ルアルディだよ。

さっき私を紹介してくれたエミルは私の王子様なの
みんなよろしくね」

「ま、マルタ…恥ずかしいよ…」

「いいの、いいの。ほらエミルもしっかりする！」

エミルにラブラブオーラたっぷり立ち上がったマルタは元気そう
な人だ。

ただ、当のエミルは恥ずかしさからなのか少し迷惑そうにしている。
まあ、エミルも嫌がってる訳じゃないから下手に干渉しない方がい
いだろう。

「ミラだ。ミラ・マクスウェル。」

今朝は学園の方向を間違え、遅刻してまいみなに迷惑をかけてしま
つてすまないと思っている。こんな私だが、どうか仲良くしてやっ
てくれ」

一筋のブレもなく言うミラは謝罪を述べているのに、かつこよく思
えた。

それにしても、今朝僕と違う方向に向かったのはただの勘違いだ

つたのか…

いや…もしかして方向音痴なんじゃ……

その後も自己紹介は続いていき、最後にアルヴィンの番となる。

「みんな知ってると思うが俺の名はアルヴィン。

『できる男アルヴィン』って覚えてくれ。

なにか困ったことがあったら俺のところに来な。

報酬しだいじゃ話にのってやるからさ」

「教師のくせに報酬なんて要求しないでよ！」

まったくなにを考えているんだろっ…

そんなものを要求するなら、いっそのこと傭兵にでもなればいいのに。

「甘ったれるなジュード！」

世の中、いつも誰かが助けしてくれると思うな。

なにかを得るにはなにかを失わなきゃならないんだよ」

「有名なあのセリフをパクってなに決まったみたいなの顔してるのさ
！」

「ふんっ！」

たしかに教師の言うべきことじゃねえ。

だけど、こいつの言っていることも間違いなく正論だ」

「アツシュ……」

横から割って入ってきたアツシュに反論しようとするが、たしかにアルヴィンは正論を言っているのだから反論できるわけもない。

「わかりました…」

結局は僕が折れるしか道はなく、自己紹介はこれで幕を閉じた。

〈放課後〉

放課後には部活見学があり、好きな部活を見て回る事ができるらしいので、僕は格技場目指して歩いていった。

格技場で部活公開を行っているのは武術部。この学園で一番盛んな部活である。

中学の時は拳法部に入っており、できれば拳法部に入りたかったのだが、ここにはそれがなく、代わりに拳法を含んだ全ての武術を駆使する武術部というものがあるのだ。もちろん、木刀などの武器の使用も承認されている。

ガタンッ

格技場の重い扉を開けると、既に一組が戦闘を行っていた。

使用武器はどちらも木刀。

一人は形式はまりながらも、鋭く堅実な剣さばきの金髪青年。対するは独特の流れるような剣さばきの

「あっ！」

朝、木の上で寝てた女の子だ！」

思わずあげてしまった大声に二人の動きが止まる。

そして、その女の子がつかつかと僕の方へと歩いてきた。

「あっ、部活の邪魔しちゃってすみ、てめえ、人を女扱いとはいい度胸じゃねえか」

ドスのきいた声に下げかけた顔をあげると、そこには怒っている人の顔があった。寝ていた時は気づかなかったけど、この人女の子じゃないかって男だ……

「ユーリ、そこまでにしないか」

「フレンは少し黙っとけ。俺は女扱いされるのが気に入らねえんだ」

ということとは、今までも何度か女扱いされたことがあったってことか……

「お前、部活見学者だよな」

「は、はい……」

「1-Aのジュード・マティスと言います」

「ならちよつどいい。」

ジュード、俺とバトルだ」

第2話 僕と自己紹介と黒髪の美女（後書き）

ユーリの怒りをもって勝負を挑まれてしまったジュード。果たしてどうなる！？

読んでくださる皆様に質問なのですが、1話の最初みたいにナレーター視点か、それ以降のジュード視点のどちらの方が好みですかね？できれば意見をいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3417ba/>

TALES OF SCHOOL LIFE

2012年1月11日20時53分発行